

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 20 日現在

機関番号：13601

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2015

課題番号：25770063

研究課題名(和文) 芸術表現における触覚的教育に関する研究

研究課題名(英文) Study about art expression and sense of touch-like education

研究代表者

猪瀬 昌延 (INOSE, Masanobu)

信州大学・学術研究院教育学系・准教授

研究者番号：40597340

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は可塑性のある造形素材を用いて触覚による表現の可能性を考察した。対象は生徒児童及びその保護者とし、研究期間内に5回のワークショップを行った。そこで明らかになったことは可塑性や泥素材に働きかけた自己を素材に写し取られた自己として鑑賞の対象とすることである。このことは自らの行為を客観的な対象として捉え直し認識することを可能にし、新たな自己の形成に関わるものであると考えられる。また、意思を直接写し取った触覚による表現を純粋に芸術表現活動と捉えることを可能にした。

研究成果の概要(英文)：This research is education by sense of touch using clay. It was studied targeted for the child and the adult. A research work stands up by 5 times of workshop. It became clear that the oneself who worked on clay is made the appreciated target. These things are to recognize an act as an objective target. I can think this thing makes new oneself. I can think expressions by sense of touch are pure art artistic activities.

研究分野：彫刻

キーワード：触覚 造形

1. 研究開始当初の背景

(1)これまで教育において芸術の教育的有用性が研究され、教科教育において「芸術による教育」が盛んに行われてきた。しかし現在の芸術による教育は言い換えると芸術を活用した教育であり芸術活動の断片的要素を抽出したものである。特に美術教育においては鑑賞教育に代表されるように、作品鑑賞を通じたコミュニケーションの学習又は言語活動として位置づけられている。本研究では触覚による表現行為を芸術表現として捉え、日常的で一貫した教育的意義を有することを示す必要があった。

(2)造形活動で多く使われる粘土や泥素材は可塑性に優れ素手による直接的な働きかけを形態の変化として写しとることが可能である。粘土は塑造制作で用いられ、一般的な造形素材である。これまでに塑造制作過程で繰り返し行われる粘土付けや削ぎ取りの行為がただ単に作品を完成に導く行為ではなく制作者の精神世界と現実世界をつなぎ合わせるものであり、制作者の自己の変容をもたらすものであることを研究してきた。そのことから幼少期や学校教育で行われる泥遊びや粘土を用いた造形活動を、その制作過程から分析することで行為と自己の変容を完成した制作物から読み取ることが可能であろうと考えた。

(3)我が国において古くから造形に適した可塑性素材として粘土が多く用いられている。現在はその種類も多様で対象や目的に合わせた素材の粘土が市販されている。そのような中で可塑性素材として我が国の伝統的素材である漆喰に着目した。漆喰は伝統的な建築素材でありながら、鏝絵に代表されるように装飾や造形素材としても使われてきた。漆喰を用いた造形活動は我が国の伝統や芸術文化理解を深めるにあたって適した素材と考えられた。

2. 研究の目的

本研究は制作行為を触覚による芸術表現と捉え教育的視点で考察するもので、芸術表現と教育を繋ぐことを目的としている。これまでの理論的研究で明らかになった作品制作と人間形成的意義の関係を触覚における自己形成と位置づけ制作実践を通して証明するものである。

(1)教育的意義を鑑み自己形成途上である 6 歳児から 12 歳児までの生徒児童とその保護者を対象とした触覚のワークショップを行い、可塑性素材を用いて発達段階と表現の関係を調査する。

(2)複数回のワークショップを行い、軟性素材を用いた触覚の型取りを通して身体による造形表現作品への展開を試みる。

(3)造形活動を通して参加者互いのコミュニケーションを図ると同時に一人ひとりの触覚による造形を共同作品制作とすることで個々のつながりをテーマとした「子ども達による芸術表現」の作品鑑賞を行う。

3. 研究の方法

本研究期間内に 5 回のワークショップを行った。具体的な取り組みは、各ワークショップにおいて触覚による造形の研究を可塑性素材の研究と表現方法の両面から考察した。

(1)平成 25 年 11 月 12 日、小学校 6 年生児童 44 名による陶土を用いたレリーフ制作のワークショップを行い、制作手法の研究と作られたレリーフ作品の効果的鑑賞方法を考察した。

(2)平成 25 年 11 月 14 日、生徒児童及び保護者、教職員 362 名を対象とし、陶土の叩き込み技法を用いた素手による陶板制作を行い、共同作品制作を行った。

(3)平成 26 年 9 月 13 日、生徒児童及び保護者 74 名による親子対話型造形ワークショップを行った。

(4)平成 26 年 11 月 30 日、小学生とその保護者 6 組による漆喰を用いた第 1 回ワークショップを行い、漆喰の基本的加工技術と

平面的表現の考察を行った。

(5)平成 27 年 3 月 28 日、小学生とその保護者 6 組による漆喰を用いた第 2 回ワークショップを行い、漆喰による立体的表現の考察を行った。

4. 研究成果

(1)叩き込み技法を用いた実践を通して対象者が粘土への働きかけとして行った行為は、つける、削ぎ取る、突く、つまむ、なでる、のばす、押すなどの行為である。それらの行為は、素材の変形を伴って行為者に行為自体を実感として受容される。すなわち行為者は働きかけると同時に自身の行為を触覚的に受容するのである。触覚による造形の痕跡は造形物に残された凹凸のことであり、レリーフ表現として捉えることができる。レリーフ表現は平面上に刻まれた凹凸を陰影によって鑑賞するものである。そのことは触覚的な受容を行っていた対象をさらに視覚的对象に置き換えることにより作者自身が重層化した行為の受容を可能にした。

(2)泥材や粘土は素材が行為を誘発する。また、誘発された行為は連続性を持ち、対象者のミメシスの働きを写し取ることが可能である。ここでいうミメシスの働きとは感情を直接的行為として写し取る働きのことである。本研究で対象とした児童生徒と成人（保護者・教職員）では、生徒児童の方に素材から誘発されるイメージや行為を通じた感情を更なる行為として素材に働きかける姿が多く見られた。一方、成人では意図的作品制作としての概念表出になる傾向が多く見受けられ、ミメシスの働きを顕著にみるができなかった。すなわち年齢が高くなるにつれ、「何をつくるか」といったことが重要になり、「作られるものをつくる」ための意図した行為が先行される。それに対して低年齢では素材から受容

するイメージに反応した行為が連続性を持ちイメージを広げていくことが分かった。両者を並べて鑑賞することによってその差異が明らかになった。

(3)これまでの研究で扱ってきた泥材や粘土は可塑性に優れ素材であり、その特異性も明らかになった。その特質を生かしミメシスの働きを粘土の凹凸として移しとることを可能にした。粘土造形は作品として鑑賞段階まで進めるには乾燥や焼成を行う必要がある。焼成を行うことで可塑性は強固な素材へと変質し強度を得る。しかし陶土は焼成することにより一割程度の収縮が起るため、焼成後の凹凸は直接的働きかけを行っていた粘土の形態とは異なったものといえる。そこで次に漆喰に注目した。漆喰は鏝絵に代表されるように造形に適した素材で乾燥によって固化する。乾燥により多少の収縮もあるが強度ある支持体に固着するために強度の心配もなく作品化することが可能である。また、漆喰は今現在多くの建築物や壁面に見ることのできる我が国の伝統的素材であり、文化理解を促す効果もある。さらに漆喰の基本的な白色は陰影によって凹凸の変化を確認しやすい素材である。

漆喰を用いた造形は、漆喰が強アルカリ性であることからビニール手袋を使い取り組む必要があり、素手での直接的働きかけは行うことができなかった。そのためこれまで行っていた手や指先の触覚の写し取りではなく体全体の身体行為を写すことへと移行した。今後の展望としてはこれまで扱ってきた建築材として市販されている漆喰は泥素材にちかく少しの力でも造形することが可能である。しかし粘度が低いため厚塗りなどの立体的な表現には向いていないため、増量剤や粘度を上げる工夫をすることによって表現の可能性が期待できる素材である。漆喰を用いた造形は我が国の文化理解を深めると共

に、可塑性や泥材の特質である自らの行為を客観的な対象として捉え直し認識することを可能にし、アイデンティティを伴った新たな自己の形成に関わるものであると考えられる。

5．主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔その他〕

- (1)一般公開：「地域の伝統的建築素材を活用した触覚的教育」須坂イルミネーションフォレスト 2014 主催一般財団法人須坂市文化振興事業団
期間：2014年12月13日～25日
場所：須坂市アートパーク
- (2)一般公開：「陶板オブジェ」
設置日：2014年10月8日
場所：長野市加茂小学校
- (3)一般公開：「漆喰を使った立体的な造形を楽しもう～生活で利用できる明りの制作～」
期間：2015年6月16日～29日
場所：須坂市シルキービル

6．研究組織

(1)研究代表者

猪瀬 昌延 (INOSE, Masanobu)
信州大学・学術研究院教育学系・准教授
研究者番号：40597340